



美術館だより

岐阜県美術館

2013.3.29
No. 69

岐阜県美術館

〒500-8368 岐阜市宇佐 4-1-22 TEL:058-271-1313(代表) FAX:058-271-1315

URL <http://www.kenbi.pref.gifu.lg.jp> E-mail c27213@pref.gifu.lg.jp

この号の内容

- 1 三幕の物語
- 2 館内外の変化
- 3 開館30周年記念展
- 4 オリジナルグッズ
- 5 体感アート@県美.com
- 6 手でみる美術
- 7 平成25年度企画展

はじめに 開館30周年

平成24(2012)年11月3日、岐阜県美術館は開館30周年をむかえました。

平成24年1月のリニューアルオープン以降、新しい展示室を活用して、開館30周年を記念する大型企画展が続きました。

今回の美術館だよりでは、それらの展覧会や館内外の変化をふりかえりながら、岐阜県美術館のこの一年をたどります。

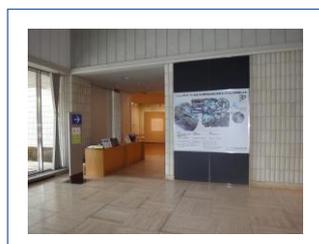
TOPICS 三幕の物語 —新展示室おひろめ—

平成24年1月11日(水)から5月13日(日)まで、リニューアルオープンを記念して「三幕の物語」と題した三つの連続する展覧会が開催されました。新展示室(展示室2)のお披露目でもあるこの企画展は、岐阜県美術館のコレクションの成り立ちを三部構成で紹介する内容でした。

第一弾は「第一幕 メセナが育む未来への遺産 田口コレクション、安藤基金コレクション」です。西濃運輸株式会社を基とする財団法人田口福寿会とセイノーホールディングス株式会社からの寄贈による「田口コレクション」。財団法人岐阜県美術振興会が管理する寄付金の運用益により購入、美術館に寄贈される作品群である「安藤基金コレクション」。当館にとって重要な二大コレクションから約120点で構成しました。迫力ある展示とともに、新展示室の光幕天井のやわらかな明るさを活かした空間がみどころでした。

2月23日(木)からの「第二幕 郷土作家逍遥」では、郷土と関わりの深い作家の作品を、時代順、動向順に並べて、岐阜の美術の流れを紹介しました。各分野における代表作家80名、約170点による構成でした。新たに収蔵された岐阜の版画コレクションの初公開も話題となりました。

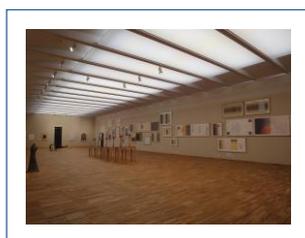
4月5日(木)からの「ルドン氏が見た夢」では、岐阜県美術館の西洋美術コレクションの核となるオディロン・ルドンの作品群を中心に、約150点を紹介しました。平成23年度の巡回展の出品作はもちろん、海外貸出から帰って来た《オリヴィエ・サンセール屏風》等も加わって、ルドンの熱烈なファンの方々にも十分に満足いただける内容でした。



三幕の物語 入口



新展示室(展示室2)



第一幕



第二幕



第三幕

TOPICS 館内外の変化

美術館の変化は、新しい展示室だけではありません。リニューアルのあれこれをご紹介します。

館の北側、レストラン近くの入り口には、増築された新収蔵庫につながる新しい搬入口ができました。収蔵庫が増えたことによって、これまでスペース不足のためにやむなく館外に保管されていた当館のコレクションが一括して、館内で管理できるようになりました。

またレストランの北、美術館の東側の道路に面して、車いすをご使用の方にご利用いただける駐車場が新設されました。館の南入口からのスロープは、傾斜はゆるやかですが、敷石が細かいのと距離が長いので、車いすを使うと震動が激しすぎました。そのため、これまでは、車いすをご使用の方には事前にご連絡いただき、美術館通用口から短いスロープで館内に移動していただいております。バリアフリーの駐車場によって、事前連絡のご不便をかけることが少しは減ったのではないのでしょうか。

館内のサインや道路に面した案内掲示板も、デザインを一新し、アイボリーとイエローをベースに生まれ変わりました。

サインの形や配色については、館内で何回も議論しました。「ピンクがいい」とか「いやシルバーにしよう」とか、さまざまな案がありましたが、共通した意見は「明るいイメージにしよう！」です。スタッフの思いがカラーから伝わりますように。



ポスターの掲示板や館内地図などのサインは、これまでの焦げ茶色から、人目を惹きつける元気な明るい黄色にリニューアルしました。

TOPICS 三つの開館30周年記念展

「象徴派 夢幻美の使徒たち」(7月13日～8月26日開催)は、19世紀末西欧に広がった精神的・神秘的なものを追求する芸術運動の「象徴派」を、国内の優れたコレクションによって紹介するものでした。眼に映る世界を超えたところにある理想をめざした芸術家たち。彼らの試みは美術だけでなく、同時代の音楽や文学、またジャポニズムの装飾理念とも連動しています。モロー、ルドン、ゴーギャン、ムンク、ボナール、ビアズリー、クノップら51作家による全212点(前後期の入替あり)による構成は、当館のオディロン・ルドンを中心とした西洋美術コレクションはもちろん、国内の名品が一堂に集い、その質と量の豊かさで見ざる者を圧倒しました。前後期と複数回ご来館くださる熱心な鑑賞者が多かったのも印象的でした。

「マルク・シャガールー愛をめぐる追想」(9月5日～10月28日開催)では、20世紀の巨匠、マルク・シャガールの作品を4つのテーマに沿って紹介しました。会期中に天皇皇后陛下の行幸啓があり、またぎふ清流国体の会期とも重なって、非常に多くの方にご鑑賞いただきました。シャガール人気を改めて感じる展覧会でした。東欧ユダヤの人々の生活に欠かせなかったクレズマー音楽のコンサートや、美術館サポーターによるシャガール展イベント「ハート・プロジェクト」のメッセージ・ボードや巨大なハートのオブジェ前での記念撮影も、来館者を大いに楽しませてくれたと好評でした。

「岐阜県美術館の歴史 30年の歩み展」(11月2日～12月24日開催)は、美術館の30年間の歴史を振り返るとともに、これからの新しい方向を模索するための企画展でした。200回近く開催してきた展覧会の歩みを、主要なコレクションと、グラフィックデザイナーの田邊雅一氏による展覧会ポスターでとどりました。会場全体を一つの作品としてとらえ、デザイナーの視点で会場が組み立てられるという、これまででない試みがなされた企画でした。特に、会場を埋め尽くしたポスターが予想以上の好評で、「なつかしい」「こんな展覧会をやっていたのか、見てみたかった」などの感想をいただきました。また、田口コレクションとして新たに寄贈されたジョルジュ・ブラック、藤田嗣治等の作品紹介も、会場で注目を集めました。



TOPICS 開館30周年記念 オリジナルグッズ

ミュージアムショップでは、開館30周年にあわせて、当館の誇るオディロン・ルドンの作品から《蜘蛛》(リトグラフ)と《黒い花瓶のアネモネ》(パステル)をイメージした岐阜県美術館オリジナルのキャンディを製作しました。ただいま絶賛発売中です！



名古屋の「まいあめ工房」とデザインを打合せながら作りました。きもかわいい(?)外観から想像できないかもしれませんが、クモのあめはやさしいピーチミルク味、アネモネあめはブルーベリー味です。どちらもほんのり甘く、普通においしいいただけます。

パッケージの表側はあめのデザイン原画がワンポイントで、裏には作品の図版が掲載されています。

担当者からひとこと

お客様から「クモのあめ?!」との驚きの声や、「作品をモチーフにしておもしろい!」など、ご好評いただいています。

かわいいパッケージもぜひ手にとってご覧ください。

平成25年度のルドン展では、巡回先の損保ジャパン東郷青児美術館や静岡市美術館でもルドンあめが販売されることになりました。

また、アネモネあめは残りわずかとなりました。お求めの方はお早めにご来館ください。

(ミュージアムショップ 高木・西村)

TOPICS ケン ビ ドットコム 体感アート@県美.com

平成25年1月22日(火)から5月6日(月・祝)まで、「体感アート@県美.com —ヌイ・プロジェクト. アボリジニ. 現代美術&子どもたちの美術—」が開催されています。本展では、「ドット(点)」を介して時代やジャンルを超えた作品に触れ、「表現」とは何かを見つめ、感じる場を紹介しています。

人が最初に描く道具を手にした時、まずは点をうつでしょう。点は、表現の始まりであるとともに、継続を示すものであり、終わりをも意味します。

本展の柱となっているのは、鹿児島島の工芸・芸術活動集団「工房しょうぶ」の糸と布による「ヌイ・プロジェクト」の作品です。類をみない集中力で蓄積された一針一針の「ドット」の作品は、作り手の魂の集積といえましょう。

オーストラリアの先住民族であるアボリジニの作品もまた、ドットで構成されています。文字を持たなかった彼らが儀式のために描いた創世記の物語、遥かなる歴史を伝達する手段として、ドットが用いられています。

そして当館や岐阜県現代陶芸美術館所蔵の現代美術の作品からも、ドットによる作品を紹介しています。それぞれの作家のドットには、どんな意味があるのか、何を表現しようとしているかを考えさせられます。またここでは触って鑑賞する作品も紹介しています。まさに「体感できるアート」です。

さらに、幼保・小・中・特別支援学校の児童生徒に、本展のために半年をかけてドットを基にしたアート体験をもらい、その作品を会場等に展示しています。子どもたちの創り出した空間のみずみずしさに、新鮮な驚きを感じていただけることでしょう。

ぜひ、アートの原点ともいえる「ドット」を通じて、アートを体感してください。



TOPICS 手でみる美術

美術館に展示されている作品には、しばしば「作品保護のため、さわらないでください」というキャプションがついています。手の脂は美術品を傷めますし、手荒にさわれば壊れてしまいます。作品にさわらないというのは、美術品を守り、次の世代へと伝えていくためには、大切なマナーの一つです。

けれども、視覚に障がいのある方にとっては、「さわる」ことは、日常生活に欠かせない重要な行為です。美術鑑賞においても、まず「さわる」こと。触覚から得られる情報が鑑賞の第一歩となるのです。さわる＝手でみる、なのです。

岐阜県美術館では視覚に障がいのある方々が来館された時、触れても保存に影響の少ない彫刻を選んで、さわる鑑賞をしていただいています。まず鑑賞の前に皆で手をきれいに洗います。作品に当たって傷ついたりする指輪などは前もって外します。それから、ものを傷めないように、優しく、そっと、ゆっくりと、さわっていきます。触感を通じて、想像力をフルに働かせながらの濃密な鑑賞です。また、さわって体感できない絵画などの作品については、ことばによる鑑賞ガイドを行います。対話を通じて、想像力を発揮するための手助けを試みます。一部の所蔵品については、立体コピーを利用した点字付きのガイドブックも用意しています。(これらの鑑賞については、事前にお問い合わせください。)

手でさわると、冷たさや温かさ、硬いか柔らかいか、「かさかさ」「ふわふわ」といった質感など、目で見る鑑賞だけでは知ることができない、重要な情報もわかります。さわることによる驚きが感性を大いに刺激し、今までにない感動を与えてくれることもあります。そのような体験をしていただくために、美術館の所蔵品のうち、天野裕夫さんの彫刻《重厚円大蛙》と《ティオティワ亜カン》の2点に「タッチ OK!」シールが付いています。「この作品は誰でも手でさわる鑑賞ができます」というサインです。来館時にぜひ「手でみる美術」鑑賞をお楽しみください。ただし作品を傷めないよう、優しく、そっと、ゆっくりと、マナーを守ってさわってくださいね。(青山)



平成25年度の展覧会

5月まで開催の「体感アート@県美.com」をはじめ、平成25年度も岐阜県美術館は見どころいっぱいの展覧会が続きます。

6月14日～8月4日「やなせたかしと『詩とメルヘン』のなかまたち」

7月10日～8月25日「近代の巨匠から現代の作家まで クレパス画名作展」

9月3日～10月27日「オディロン・ルドン 夢の起源」

11月8日～12月8日「素顔の玉堂 川合玉堂と彼を支えた人びと」

平成26年 1月24日～3月9日「第7回円空大賞展」

それぞれ担当者が開催の準備に励んでいます。乞うご期待！



編集後記

今年度第2号の美術館だよりとなります。現在、継続的でタイムリーな情報をお伝えするべく、Web ニュースレターの準備中です。楽しみにお待ちしております。(青山)



県民文化の森 **岐阜県美術館**
THE MUSEUM OF FINE ARTS, GIFU

〒500-8368 岐阜市宇佐4-1-22 Tel.058-271-1313 Fax.058-271-1315 URL http://www.kenbi.pref.gifu.lg.jp/

お問い合わせ

岐阜県美術館

〒500-8368 岐阜市宇佐 4-1-22

電話番号: 058-271-1313

FAX 番号: 058-271-1315

電子メール: c27213@pref.gifu.lg.jp